

川口晴美 詩 5 篇

おかえり（詩集『半島の地図』2009 より）

夏の果は血のように滴る（詩集『Tiger is here.』2015 より）

半島の地図（詩集『半島の地図』2009 より）

人造（詩集『Tiger is here.』2015 より）

席（詩集『半島の地図』2009 より）

おかえり

誕生日おめでとう、と帰ってきた男がにっこり差し出したのはひとかかえもある箱で
反射的に受け取りながら予想外の重さに二、三步よろめいてありがとうを
言うタイミングを逸してしまったけれどそれはわたしの誕生日が九ヶ月以上も先で
いっしょに暮らして何年にもなる男が間違うわけではないのだからもしかしたら
自分が記憶違いをしているのだろうかと思いついたから
だけでももちろんそんなはずはない にっこり
ぱりぱり包装紙を破り開くと水槽が
あらわれる 誕生する
でもからっぽ
ここにはきれいな熱帯魚もかわいい亀もすてきなカメレオンもないから困って
とりあえず 映らなくなったテレビのかわりにテレビ台に置いてみると意外と似合う
おなじようなものかもしれない
そういえば ずいぶん前に壊れたテレビを男と二人で抱えて粗大ゴミ置き場に
捨てたあのときはコドモを森に捨てるみたいで何度も振り向いてから二人で
走った夜明けの空の壊れものめいた青が肌にうつっていつまでもとれない気がした
着替えた男はテレビ台の前のソファで缶ビールを開ける
隣に坐ってからっぽの水槽をいっしょに眺めるのもいいだろうけどせっかくだから
入ってみることにした
右足で跨ぎ左足をおさめ 微かにきしむ音がしたのは水槽かテレビ台かわたしか
膝を抱えるかたちでまるとちようどよくあてはまる
ウレシイコンナノ欲シカッタんだと言ったのはわたしかテレビ台か水槽か
ひんやり真新しい水に触れるようで硝子板がきゅうっと腕や足裏に吸いつく
意外と いい
男は笑ってビールを飲みテレビを見ていたときとおなじ顔でぼんやり水槽を見ている
パジャマになってから何となくまた入ったらそのまま気持ちよく眠ってしまったので
当然のなりゆきとして次の日からそこがわたしの巣になり
外から戻るとただいまと言いながら鞆を投げ出し服を脱ぎ捨ておやすみなさいと水槽に
入る
きゅうっ
帰って来た男は静かにソファに坐り開けた缶ビールを飲み干しながら眺める
眠っているわたし
からっぽの水槽
それとも映らなくなったもうないテレビの画面
ぼんやりして
ただいまおやすみなさいオカエリただいまおかえりオヤスミナサイおかえりおかえり
誕生する
わたしのなかにはなにもない

壊れたら　こんどは一人だから台車がいるだろういつか粗大ゴミ置き場まで行く男の
誕生日には台車をプレゼントしておいてあげようおめでとう
ただいま　肌は夜明けの青いいろ

夏の果は血のように滴る

父は夏に死にました
もうずいぶん前のことです
そのときわたしは日盛りの暑さで頭がわれるように痛い思いながら
遠く離れた東京の街路をなにも知らずに歩いていて
携帯電話なんかまだ誰も持ってなくて
夜になって帰宅してから伝言を聞いて折り返し電話をかけたら
母はわたしの名を呼んで「かなしい」とだけ言いましたたぶん泣きながら
翌日の早朝に弟と東京駅でおちあい四時間半かけて小浜へ
帰り着いたらやっぱりひどい暑さでした
集まった親戚や近所のひとたちで狭い家はざわついていて
誰かが茹でておいてくれた素麺をさあ食べて一息つきなさいと台所の隅で出されたけれど
味がなくてそういえばわたしはそれから何年ものあいだ素麺を食べたくなくなった
凹のかたち抱かれた海のある町で父はずっと電気工事の仕事をしていて
その夏の真昼　頭上に落下してきたものがあったのです
ちょうど休憩時間になりヘルメットをとって汗を拭いながら歩き出したときでした
単純に言えばそういうこと
もう少しこみいったことは何日かたってから父の会社の会議室で説明され
ああ事故って起こるんだなと思いました
どの一人が悪いっていうんじゃなく人間が集まってやっていることだから事故は起こる
どこでだって

二人は仲が良かったから母はおそろしいくらいに泣き
いっしょにいくのだと棺にとりすがるので
母の姉とわたしは監視するみたいに母から離れないようにして二日間を過ごし
ようやくひとの少なくなった家の不思議にあかるい台所で
夥しい数のコップや皿を三人で黙々と洗ったのは
通夜も葬式も終わってからのこと
母が突然「キーホルダーがない」と言い出しました
なんのことかわからずに伯母とわたしは顔を見あわせましたが
母は小走りに勝手口から出て行きくちをかたく結んで裏に置いてあったゴミ袋を

持って戻ってくると三和土でそのくちをほどこしました
冬にいっしょに温泉へ出かけた（それが二人の最後の旅行になった）
記念に買って財布かなにかに付けて肌身離さず持っていたはずのそれが
病院から渡された携行品のなかにはなかったと
母は言いつのります
ゴミ袋のなかには事故にあったとき父が着ていた作業着が入っていて
大量の血が染みこんだ布は真夏の二日を経てほどかれてすさまじいにおいを放ちました
漁港と魚市場のある町で育ったけれどこんなにおいはいだことがない
わたしのなかをいま流れているものにとっても近いはずの血が
生きている体から流れ出てしまえばこんなになるのだと
呆然としながら息をとめて
いつもてきぱきしておしゃべりな伯母も無言のまま動かず
母だけが話し続けながら（だから息をとめることもなく）
ゴミ袋に両手をつっこんですっかり色が変わった作業着を広げ
内ポケットの底にあったキーホルダーを素手でさぐりあてて取り出しました
「ほら、あった」と幸福そうに笑っているこのひとは
誰なのだろう
病的なほどきれい好きで神経質で気が小さく
肉も生魚も苦手だから料理のためにさわるのも本当は嫌だと言ったあの母じゃない
獣のように血のにおいのなかで微笑んでいる
わたしはこのひとを知らない
濃い夏の夕暮れ深く
かろうじて左右の口角を吊りあげてうなずいたわたしは
おそらく生まれて初めて
たった一度だけ母を
畏怖しました

（血は流れた
血は流れている
わたしのそとに
わたしのなかに
わたしかもしれない獣がそこにいて
どこへも届かない遠吠えを滴らせている）

夏に死んだ父には
いろいろなところから瑞々しい果物が届けられ供えられました
葡萄 バナナ 桃 梨 メロン 葡萄 桃 桃 蜜柑 西瓜 梨
仏壇から漂うあまいにおいはまたたくまにねっとり濃くなり
すぐに黒いこまかな虫が飛び始める
母とわたしは追われるように

毎日まいにち腐ってゆく順番に果実を切り皮をむき
食べ続けました
すべてが終わってしんとなった家で
噛みしめるまもなくとけ崩れていく果肉の汁が指から腕へ幾筋もつたって
おいしいかどうかもはやわからない滴を唇から胸元まであふれこぼれさせてすすりこむ
暑い夏でした

半島の地図

夏に歩いた海沿いの道を
指でたどる一人の夜
秋の紙はひんやり滑らかに
乾いている
そこからはもうどこへも行けない半島の先端で
立ちどまり見あげた空の下
あふれこぼれていた水分は
いったいどこに仕舞われてしまったのだろう
波が削り取っていったという離れ島が
あのとき沖に光っていたけれど
地図には載っていない
(ミズシマ)
記されなかった名を発音する唇が微かに
震えながら開かれるから
指は紙を離れ
秋のテーブルの葡萄をひと粒つまむ
塞がれて
あまく苦く深まった水を
夏のくちづけに似せて唇へ運ぶと
夜の光を連れて滴り
半島のような腕をたどって
冷えた地図に
わたしの熱を小さくまるく記していった

人造

湖は午後の日射しにぬるんでいる
手を離さないでいてね
スワンボートが浮かぶ水面は眠いから
ゆっくり歩くわたしは娘に繰り返し囁いた
それとも娘が歌うようにわたしに繰り返していたのだろうか
冷たい草の茎みたいな指先がそのたびにきゅっと震える
つながって震える
手を離さないでいて
遊歩道の向こうは小さなアミューズメントパーク
整えられた樹木に隠されてジェットコースターが
時折ゴオオオッ……と近づいては遠ざかり
聞こえてくる楽しげな悲鳴
反射的に指先に力がこめられて少しだけ爪がくいこむ
そう
そうしていてね
そうしていたはずなのに
いつのまにか娘はいなくなった
遊歩道の敷石にソフトクリームの垂れ落ちた跡
どこへ行ったの
貸しボート屋の二階のレストハウスは閉まったまま
窓際に飾られた鮮やかな花は枯れることがない
つくられた湖を蓋するように磨りガラスめいた空が頭上を覆い
ゴオオオッ……と近づいては遠ざかる響き
悲鳴が消えていく
離れて
失われて
いない娘を求めてわたしは湖をめぐる
ここにはないものを見つけようとする眼球は漣立ち
土産物屋に揺れる人影がどれも娘のような気がする
いいえ欲しいかどうかわからない何かを探しているあれはわたしなのか
どこにもいない
最初からいなかったのかもしれない
わたしの娘はどこにも
遠いスピーカーから流れる間延びしたメロディ
最初からいなかった
わたしは娘を捨てたのだろうか
わたしはずっとひとりだったから

それとも娘がわたしを捨てたのだろうか
いらなくなって
どこへ行くこともできないつくられた湖の縁に
微かに吹き渡ってくる風は埃っぽくなつかしい肌に似たにおい
そうだ娘だったのはわたしのほうで
つながれた手から離れてここまで来たのだったかもしれない
ゴオオッ……
近づいて遠ざかる
娘はいない
遠ざかって近づく
娘はいる
わたしのなかに
つくられた湖
手を離さないでいてね
いなくなるから
繰り返し
消えながら悲鳴は反響する
わたしのなかにいた
いたかもしれない何かがいなくなって
いなかったかもしれない何かのかたちが
明るい水になって広がっているこれは
わたしですか娘ですか娘のいないわたしはいますかここに
ないものを見つめようとする眼差しだけが残されて
まだ震えている指先の
うろう草の先端に湛えられた水滴のような爪で
湖に触れる
失われたものもないものも
思い出せないものも忘れられないものもとけて混ざった水の肌に
しるすように少しだけくいこませて
つながれていく

席

夕暮れのレストランの二階で窓際のテーブルに座って
あまいお酒をひとくち飲むと
狭い通りをはさんだ向かいのビルの

おなじ高さにある喫茶店の窓際の席では誰かがコーヒーを飲んでいる
知らない横顔だけれど
わたしもまえにあの席でコーヒーを飲んだことがある
今日はたまたまこちら側にいるだけで
あちら側でコーヒーを飲んでいるのがわたしであってもおかしくはない
あれはわたしだったかもしれない

ずいぶんまえに遠い国で船に乗って川を下っていたとき
川辺に繁茂する植物のかげに男の子がひとり立っているのが見えた
ぼんやり船を見送る裸の上半身が濃く日に焼けているのがわかって
すぐに見えなくなった
あの子は一生べつの国に行くことはないかもしれない
もしかしたら生まれた村よりほかの場所を見ることもないかもしれない
あの子とわたしはたった一度すれちがって
きっと二度と会わない
でも
わたしはあの子だったかもしれない
通り過ぎてゆく船に乗っている方がわたしだったのはたまたまで
川辺の村で一生を過ごす男の子に生まれていたとしてもおかしくはない
それはどんな感じがするだろう

わたしではないわたしよ
今日のコーヒーはおいしいか
川は穏やかに広々と流れているか
あまいお酒はこの体を流れ落ちてどこか見えないところへ染み込み
滲んでゆく
向かいの喫茶店の下の八百屋には明かりが灯り
ならんだ秋の果物のいくつもの形と色を輝かせはじめている